



よきおとずわ
CATHOLIC NAGASAKI MONTHLY
カトリック長崎大司教区報

迷惑をかけてきていることもあるだろうし、気づかないうちに反感を買うような行動を取っていたかもしれない。相手に責任があるにせよ、自分にあるにせよ、よく思い出して、仲直りは自分から進んで働き掛けよう。相手が悪くても、こちらから

2011 広島ピース・スタディー

8月5〜6日、広島市で開催された広島教区平和行事に、長崎教区平和推進委員会をはじめ神戸、島、深堀、曾根、浦頭の各教会の中学生と一般信徒ら総勢45人が高見三司大司教と共に参加した。



広島到着後は、カテドラル・平和教会(世界平和記念聖堂)で行われたシンポジウム「証 1945・2011」に参加。広島島の被爆者山口裕子さん、岡山市出身で12年前から福島在住の大塚愛さん、東日本大震災の被災地災害ボランティアとして活動している江藤さおりさん(長崎教区浦上教会所属)ら3人の発題者が、それぞれの視点からの経験や思いを訴えた。その後、平和公園に移動し、戦時教会までの約1.6kmを聖歌を歌いながら行進。戦時教会で三末篤實広島司教(写真内)司式による平和祈願ミサ(写真)

中高生は、「世界という大きな範囲ではなく、自分の周りから平和にしていきたい」「崩壊してしまった福島原発を見て、人間が簡単に核エネルギーに手を出してはいけないと感じた」などと感想を話していた。

ピース・スタディーの結びの総括の中で高見大

長崎市平和祈念式典

8月9日、被爆66周年を迎えた長崎市では、市長は、原子力にかかわる再生可能エネルギーの開発を進めることの必要に触れ、また原爆と東日本大震災による犠牲者へ追悼の意を表すとともに、広島市と協力して核兵器廃絶を世界に訴え続けていくことを宣言した。写真上。最後に純心女子高校の生徒らによる「千羽鶴(作詞・横山 鼎、作曲・大島ミチル)」合唱があり、終了した。

落着いて立派に司会役を果たした長崎南高2年の古村彰宏さん(馬込教会所属)は、「過去最大規模の式典といわれ少し緊張しましたが、平和への願い、原発事故の被災者の方々の思いも感じて臨みました。人の

名前を言う時に間違いがないよう、高齢の方にも分かりやすいよう声の大きさや発音など気をつけ

司教は、「長崎でも平和教育を行ってはいけるが、時代とともに危機感は薄れ、学ばない人たちが増えている。核兵器で国を守るというけれど、兵器は人を殺す道具であり、わたしたちはキリストが

悲愴さや平和の大切さを世界に発信する委嘱を受けた長崎の非核特使ら11人と菅 直人首相が原爆忌の8月9日、長崎市内のホテルで会談した。

行動していく責任があります」と述べ、皆、平和への決意を新たにしました。

菅首相、非核特使と会談
政府から核兵器使用の

首相が提言したもので、

ミサに先立ち沈黙の祈りをささげた。

広島・長崎で延べ34人が政府の委嘱を受けて活動している。

アメリカのカトリック紙
記者が大司教を訪問

かつて明治新政府が没収した浦上信徒らの聖具や祈禱書が、時を経て浦上の地へ帰ってきた。

長崎の非核特使は6月末、外務省を訪れ、証言活動の報告。青山学院大学で証言活動の総括を行った。(写真、会談後、首相と握手する出席者)

「被爆者に会うため、そしてその方々のことを紹介するために」広島と長崎を取材に訪れたアメリカ・カトリック紙の記者が8月10日、長崎大司教館を訪問し、原爆や長崎の教会の歴史、信仰に

贈呈されたのは、幕末・明治維新期の浦上信徒らが筆写・保蔵していた聖具、祈禱書、教会暦など計23点。浦上四番崩れの流配の際、政府に没収され、東京に移送。その後、外務省の倉庫に保管されていたが、1996

「被爆者に会うため、そしてその方々のことを紹介するために」広島と長崎を取材に訪れたアメリカ・カトリック紙の記者が8月10日、長崎大司教館を訪問し、原爆や長崎の教会の歴史、信仰に

長崎純心大学の濱田洋子教授と共に高見三司大司教のもとを訪ね、1時間余りにわたって熱心に取材した写真。

贈呈されたのは、幕末・明治維新期の浦上信徒らが筆写・保蔵していた聖具、祈禱書、教会暦など計23点。浦上四番崩れの流配の際、政府に没収され、東京に移送。その後、外務省の倉庫に保管されていたが、1996

「被爆者に会うため、そしてその方々のことを紹介するために」広島と長崎を取材に訪れたアメリカ・カトリック紙の記者が8月10日、長崎大司教館を訪問し、原爆や長崎の教会の歴史、信仰に

長崎純心大学の濱田洋子教授と共に高見三司大司教のもとを訪ね、1時間余りにわたって熱心に取材した写真。

贈呈されたのは、幕末・明治維新期の浦上信徒らが筆写・保蔵していた聖具、祈禱書、教会暦など計23点。浦上四番崩れの流配の際、政府に没収され、東京に移送。その後、外務省の倉庫に保管されていたが、1996

「被爆者に会うため、そしてその方々のことを紹介するために」広島と長崎を取材に訪れたアメリカ・カトリック紙の記者が8月10日、長崎大司教館を訪問し、原爆や長崎の教会の歴史、信仰に

長崎純心大学の濱田洋子教授と共に高見三司大司教のもとを訪ね、1時間余りにわたって熱心に取材した写真。



8月9日8時半から長崎市文教町の純心女子学園で、遺族、生徒、教職員関係者ら参列の下、純女学徒隊原爆殉難者慰霊祭が行われた。



会では説教の中で東日本大震災の出来事について触れ、「わたしたちの命は自分自身のためだけにあるのではない。多くの人を励まし、力づけ、

いとおしむことができる。人を愛することによって本当に輝きを放つもの」と語るとともに平和への祈りを呼び掛けた。

その後、校庭にある慈悲の聖母像前で墓前祭があり、献花が行われた。生徒代表の石井菜緒さん(中3)は、「被爆者の生の声を聞くことができる世代はわたしたちが最後かもしれない。だからこそわたしたちには、二度とそのような殺人兵器が使用されないよう、二度と戦争が繰り返されないようにしっかりと考え、

教会の鐘が鳴り響き、聖堂に集まった信徒たちも、

また説教では、66年前の、想像を絶する浦上の惨状を経験した先人たちの平和への祈りが、歴史ある浦上の土壌に加えられ、今の浦上があることを想起させ、荒廃中にも新たな希望があることを説き、東日本大震災からの復興を祈った。

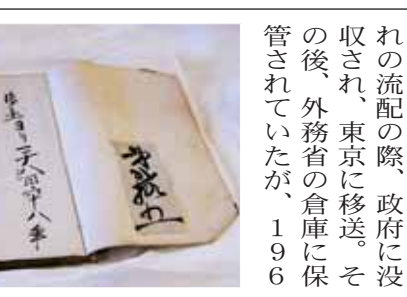
贈呈式前のミサの説教の中で、小島 栄主任神父は「今日贈られる資料を折りに触れては目にし、先達から信仰の在り方と熱意を大いに学んでいかなければならないと思います。そういった意味で

志師は、開式の中で、原爆犠牲者と共に東日本大震災の犠牲者のためにも祈りをささげるよう呼び掛けた。

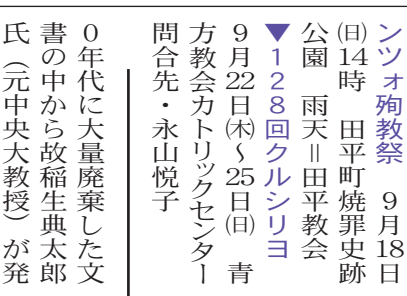
贈呈式後の講演で資料について丁寧に解説する清水さんと、右は妻・直子さん。



今日は大きなお恵みの日です。わたしたちの信仰を振り返りながら信仰の証しとして、また信仰の大きな助けとしていくことができるよう祈りましょう」と説いた。



資料の1つ「聖教日課。『御主ヨリ一千八百六十八年慶応四年辰三月九日 岩永』と記されている。



0年代に大量廃棄した文書の中から故稲生典太郎氏(元中央大教授)が発見し収集。稲生氏は定年退職の折に「奇跡的残存」と同資料を清水さんに継承し、清水さんは大学退職後も大切に保管していた。しかし最初の持ち主である浦上に返すのが一

番と判断し、関係者らの協力もあつて今回の贈呈へとつながった。

清水さんは「幾久しくお納めくださいますようお願い申し上げます」と言葉を送る。小島主任神父に目録を手渡した。資料は現在、浦上教会の司祭館に展示されている。

右の方々から神学生養成のために、香典返しに代えてご芳志を賜りました。お礼とご報告を申し上げます。お礼とご報告を申し上げます。

香典返し
お礼とご報告

長崎カトリック神学院
区典礼委員会主催

祭 9月25日(日) ①14時
西坂口ザリオ行列
中町教会 ※雨天時、行
列中止 ②14時45分 中
町教会でミサ(司式・高
見三司大司教、説教・久
志利津男師)

子どもたちと共に 音楽朗読会

一城山教会

8月6日、ながさき「水の会」主催による「マリアの丘から愛をこめてIV」平和を祈る音楽朗読会、子どもたちと共に「が城山教会で行われた。



(対馬丸の子どもたち)を朗読し、会場は静かに聴き入っていた。聖マリア学院音楽クラブ SCORE の子どもたち16人も合唱で出演した。会場を訪れた人からは、「とてもよかった。子どもたちの清らかな歌声にも心を動かされた」との感想が聞かれた。

オリニスト牧千恵子さんとアコーディオニスト Miyack (ミヤック)さんのユニット「ドウ・マルシェ」。

日本の童謡やクラシック、2人でつくった楽曲「生きて」など9曲を、利用者や職員らを前に情緒豊かに演奏した。集まった人々からは時折、手拍子が起こったり、笑みがこぼれた。

朗読、音楽、映画―平和を祈って

子が起こったり、笑みがこぼれた。

「水の会」は、元TB Sアナウンサー今井登茂子氏が主宰する朗読会。4回目の開催を迎えた今年も平和を祈る思いを込め、東京と長崎の「水の会」が、「ちいちゃんのかげおくり」と永井隆博士没後60周年によせて「長崎の鐘」をそれぞれ朗読。また今井氏が多くの子どもが犠牲になった「対馬丸」を描いた「海のトランペット

長崎平和特派員による演奏

一恵の丘原爆ホーム

長崎原爆の日の翌日、8月10日に恵の丘原爆ホーム(長崎市三ツ山町)で、音楽家らによる、平和を祈る演奏が行われた。



今年2月に長崎平和特派員に認定された、バイリしていた。同ホーム別館の職員は、「昨年訪問してくださった時同様、素晴らしい演奏でした。被爆地長崎で原爆の日の時期に演奏することを(ドゥ・マルシェさん自身が)喜んでくださり、そして利用者の方々も感銘を受けていた様子でした」と話した。

「ヒバクシャ 世界の終わりに」上映

―カトリックセンター

7月24日カトリックセンターホールで「ヒバクシャ 世界の終わりに」の有志たちによる上映会が、鎌仲ひとみ監督を迎えて開催され、150人余が観賞した。この映画は、2003年カトリック映画賞受賞作品でもある。広島・長崎への原爆投下後も、核開発による被ばく、原発による被ばく、湾岸戦争時にアメリカ軍が使用した劣化ウラン弾による被ばくなど、世界各地でヒバクシャは後を絶たない。国家の安全保障や平和利用のために推進されてきた核開発の陰。しかも、被ばくの影響をもっとも受けやすい

聖フランシスコ病院修道女会

石岡ヒロ子修道女

160年を経た同修道会は、「病人、孤児、お年寄りのお世話など助けを必要としている人々への奉仕」をモットーとする。同病院で看護部長を務める石岡シスターの1日は、朝の祈りと6時のミサに始まる。18時までの勤務の間病院で過ごす



サに始まる。父の仕事の関係で転居が多かったが、いつも教会に近い場所が縁があった。自身は高校生の時に受洗。姉2人も高校、両親は臨終の時に受洗した。看護学

マリア

松本ミキ修道女
(お告げのマリア修道会)



6月25日、聖マリア病院で帰天。93歳。三井楽町獄で生まれ、1939年(昭和14)22歳で三井楽修道院入会。農耕、保育園での調理や保育の手伝いにいそしみ、晩年は病床での祈りのうちに日々を過ごされた。生来の朗らかさで、即興の歌や踊り、ものまねで共同体に明るい雰囲気をつくり出していた。葬儀ミサ、告別式は同26日、三井楽教会で行われた。

モニカ

杉山ノエ修道女
(お告げのマリア修道会)



7月30日、特別養護老人ホーム福見の園で帰天。95歳。新上五島町浜串で生まれ、1933年(昭和8)18歳で桐修道院入会。生涯のほとんどを修道院および教会賄いとしての奉仕にささげられた。晩年は病床での祈りのうちに日々を過ごされた。葬儀ミサ、告別式は同31日、桐教会で行われた。

シラー

山口シズエ修道女
(長崎純心聖母会)



8月8日、聖フランシスコ病院で急性白血病のため帰天。77歳。広島県で生まれ、15歳の時に受洗、57年入会。初誓願宣立後約50年間、各地で幼児教育に携わった。発病後は入退院を繰り返していたが、病苦と祈りを特に出会ったすべ

巡回教会めぐり

⑦

浜串小教区

福見教会

100周年に向け
信仰を見つめ直す



福見地区にキリスト教が伝えられたのは、「町郷土史」によると1799年、5人の男女が西彼外海町から迫害を逃れて生活を始めたのが

きつかけとされている。当時は迫害も厳しく、公に信仰を守れる状況ではなかった。初代の聖堂は1882年に建てられたが、2年後に台風で崩壊している。現在の聖堂は1913年に完成し、4月29日、パリ外国宣教会ヒュウゼ師によって献堂式が行われた。

高井旅教会の特徴は、屋根を除く全体が赤レンガ造りで、左右にステンドグラスが張られ、高い梁

高井旅教会 今年、献堂50周年

世帯がカトリック信者で、島内でも有数のカトリック集落となっている。2013年4月29日が現在の聖堂の100周年にあたり、自分たちでできる範囲の記念行事を計画したいと話し合いを重ねている。(浜串教会主任・中田輝次)



た。当時の主任司祭山口福太郎師は指導者である元帳と時間をかけて話し合い、集団で要理教育を施した。1939年カトリックに復帰。洗礼台帳には、同年4月29日、まとめで54人の受洗が記録されている。福見教会所属の高井旅信者は、月に1回のミサにも行くことができなかった。何となく高井旅に教会をとの熱意に燃え、1961年6月4日松本長太郎師のとき聖堂を建立し、山口愛次郎大司教によって献堂・祝別された。

独特の体験を持つ高井旅信徒は独立心が旺盛であり、自分たちで巡回教会を守り伝えたいとの気が始まりといわれている。そのため住人の大半は隠れキリシタンだった。



真手ノ浦小教区

焼崎教会

深い信仰の絆で
助け合う祈りの集落

焼崎キリシタン集落のルーツは1870(明治3)〜77年(明治10)の

洗礼台帳から推し量ると、祖父の出身地が西山、三重、神の浦、大野、浦上の西に在する岩屋があり、下五島の久賀島もあり、当時の隠れキリシタンたちは密かな組織の中で互いに深くかわつていた。

深い入り江の浜辺、裏山の緑に囲まれた赤い瓦の教会。眼前には静かな海が広がっている。そこに住む人々の生活は、明日に思い煩うことない祈りの集落を写し出している。(真手ノ浦教会主任・川原昭如)

新刊良書

★シリーズ 福祉に生きる61 永井隆

山田幸子 著

医師、平和主義者、キリスト者として生きた永井

て、そして修道会があること」

北海道三笠生まれ、夕張育ち。「母は、幼いころわたしたち姉妹を教会に連れて行き、日曜日や夏休みも教会学校に通って

校卒業後は助産婦の勉強をし、就職。カテキスタとして導いてくれたシスターや、黙想会で指導してくれたトラピストの神父とのかわりなど、さまざまなお出合いと祈りの中で次第に召命の道へ。就職して3カ月の時、修道会入りを決意した。「日高の静内教会の主任司祭だったロイ神父さま(アルコール依存症となりアメリカの施設でリハビリに励み、日本でのダルク設立に協力、2005年に逝去)は、手紙の中で『弱さの中に働く神の力』という言葉を繰り返して語っておられ

ました」と振り返る。「毎日、神さまの不思議な働きがある。信者と信者でない者との違いは、神さまから愛されていることを知っているか知らないかというくらいの違いではないでしょうか。神さまは、看護や医療に携わる人々を通して癒やしてくださり、働いてくださっていると感じます。その思いは年々強くなっています」

聖フランシスコ病院修道女会会員。カトリック看護協会長崎支部員。

※ダルク 薬物依存症者のための回復施設。

隆は、まさに「福祉」に生きた人。本書は「福祉」からその生涯をとらえた初めての本である。

医師であり自身も原爆の被爆者でありながら、救護活動を指揮、重症病中の自己を研究・記録した不屈の精神力。離島

僻村における診療活動、戦地での文化・医療活動などに永井隆博士の福祉活動の源泉を探る。

著者は長崎純心大学教授で純心聖母会会員。大空社、2100円。※各書店にて取り扱い。

800キロの奇跡 わたしのサンティアゴ巡礼①

川上健治(大野教会)

わたしがサンティアゴ巡礼を知ったのは、7年ほど前、対馬に勤務しているころカトリック新聞に掲載された、1人の礼拝の女性の巡礼記事である。それ以後、家内も訪れたことのあるサンティアゴを歩いてみたいと願っていた。



それを知った家内は、昨年、定年の記念に「聖ヤコブ年のサンティアゴ巡礼ツアー」に申し込んできた。家内はそれであきらめると思っていたらしい。日々歩く訓練をして、長崎巡礼センターで紹介された「26聖人の道」を福岡から長崎まで巡礼する方々と共に、1月末、雪の中約155kmをたどった。その1週間、家内の思惑をよそに、いよいよ行く気になった。その気になったわたしを闘病中のN神父さまが後押しした。周囲から、「1人で？」とあきられたり、「話せるのか?」「やめたら!」と言われるほど、かたくなに頑張った。今歩かなければ、歩く意味がない。だんだん体力もなくなるし、今しかない」と家内を説き伏せ4月8日、N神父さまに報告、祝福を頂く。



うにか不思議のメダイ教会に導かれた。ミサにばかりロザリオを繰る。神父さまの回復と巡礼の無事を願う祈る。

サンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路

スペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラ(ここには聖ヤコブの遺骸があるとされる)への巡礼路。主にフランス各地からピレネー山脈を経由しスペイン北部を通る道を指す。ローマ、エルサレムと並ぶキリスト教の三大巡礼地。徒歩によるスペイン横断はおよそ800kmの道程。巡礼路のうちスペイン国内の道は、1993年にユネスコの世界遺産に登録。

「主の食卓を囲み、いのちのパンをいただき、救いの杯を飲み、主にあつてわれらは一つ」(聖歌「マラナタ」から)

みことばにふれて

山口竜太郎神父
(水の浦教会)



カット・赤尾亜依理さん
(城山教会、小5)

今年の黙想会のテーマは「ミサ」でした。大神学生の話聞き、神父さまの指導の下、聖堂の中での所作と侍者の練習をし、シスターの指導の下、ホスチアを折りをさ

き、鶴に折ってミサの中で奉納することにしました。感謝のミサの説教の中で、ある神父さまがこん

体はいつもと違って格別においしいことでしょう。イエスさまと結ばれている。そんな気持ちになれることは素晴らしいことといえます。でも、

な話をされました。「今日は1日ミサについて話を聞きます。このミサのために、いろいろな準備をしてくれました。今日いただく聖

イエスさまはそれだけで「わたしだけ」「家族だけ」「仲間だけ」の幸せをイエスさまは説かれな

「命を考えるフォーラムと音楽の夕べ」日本二十六聖人記念館



7月30日、佐世保市振興会館体育館において、佐世保地区ドッジボール大会が開催された。

今年は各小教会から計20チーム約300人の子どもたちが参加し、熱戦を繰り広げた。熱かったのは試合だけでなく、応援に駆け付けた家族、監

佐世保地区ドッジボール大会

7月23日、長崎市西坂町の日本二十六聖人記念館ホールで、記念館見学、「語る会」と音楽の夕べとして「命を考える」長崎の自殺防止フォーラム」が行われ、約80人が参加した。NPO法人サンミツク出島(街づくり活性化研究会)主催、同記念館を支える「26の会」協力。

第1部は、長崎県職員の小川秀樹氏から「日本、長崎県における「自殺の現状」の報告、みなと司法書士の入山和明氏から自殺の要因について説明

があった。その後、長崎ダルク代表の中川賀雅氏から「私の体験」長崎大経済学部研究生で中国か



8月7日、丸尾体育館を会場に、11小教会の小学生15チームが出場したドッジボール大会が開催された。十分に練習を重ねたチーム、何とか大会に間に合ったチーム、事情はさまざまだったが選手は全力で試合に臨み、熱戦を繰り広げた。また互いの教会で友だちになる子どもも多かった。

小教会によつては、2チーム出場させた教会もあったが、中には1チーム10人のところを8人で出場し、見事に5位に入

上五島地区ドッジボール大会

8月12日、シーハットをおおむらを会場に長崎地区子どもスポーツ大会が行われ、ドッジボールの熱戦が繰り広げられた。

長崎地区ドッジボール大会

8月12日、シーハットをおおむらを会場に長崎地区子どもスポーツ大会が行われ、ドッジボールの熱戦が繰り広げられた。

父(青方教会)から表彰を受けた。それぞれ、誇らしげに賞状を受ける姿に、少子化の中でも希望の光を見る思いだった。結果は次の通り。

1位 土井ノ浦教会
2位 曾根教会
3位 桐教会



賞した教会もあった。

1位から3位は、上五島地区長の橋口朝光神父

試合に先立ち、みことばの祭儀が行われ、大水満助祭(長崎教区)が説教の中で、みんなが一つになることの大切さを語った。

今年は長崎地区の教会から21チームが参加。試合は5コートに分かれて予選リーグを行い、勝ち上がった10チームが決勝トーナメントで対戦した。公開抽選もあり、会場は大いに盛り上がり、各教会の保護者らも応援に熱が入り、参加者は皆、楽しい1日を過ごした。

結果は次の通り。
優勝 稲佐教会
準優勝 植松教会
3位 木鉢教会

主の平安
カトリック式葬祭・飾付一式
(有) 栄光式典社
代表取締役 ヨハネ 西村 勇二
長崎市辻町7-18 TEL(095)844-4011
24時間営業 FAX(095)843-9896

墓地改修・新設 個人のご相談も承ります
実績 城山教会墓地 館の浦教会墓地
浜串教会墓地 青砂ヶ浦教会墓地 他 多数
(有)長崎大理石 社長 ヨハネ 濱本直行
本社 長崎市つづが丘5-1-15 (TEL)095-839-0374
加工工場 諫早中核工業団地

砕石・栗石・港湾用捨石一式生産販売
たつみ産業株式会社
西田商事株式会社
代表取締役 ミカエル 西田 寛己
本社 〒857-1166 佐世保市木風町1468番地
TEL (0956) 31-8268

石 碑
納 骨 堂
墓地工事
墓地分譲
(高尾・本原他)
なが さき せき ちよう
長崎石彫
ヨゼフ 岩永 博明
☎(095)862-2469
長崎市梁川町 6-17 岩永ビル